



第60回桂川祭(学長と鍋しよう!!)



第42回鶴鷹祭(実行委員長挨拶)



夏季オープンキャンパス



新学章

特集 創立60周年 2

創立60周年記念式典の様子

創立60周年記念式典(大谷理事長の式辞、福田学長のあいさつ)

新学章・ロゴの制作について 初等教育学科教授 鳥原正敏

愛唱歌の制作について 初等教育学科教授 清水雅彦

創立60周年記念誌について 初等教育学科教授 藤本 恵

創立60周年記念講演会の様子 副学長 阿毛久芳

英文学科グローバルキャリアプログラムが始まる 8

英文学科グローバルキャリアプログラムについて

英文学科教授 今井 隆

文大に就任するにあたって 10

国際交流センター特任講師 宮城春美(スサナ)

夏季休業を利用して学外で学ぶ 11

初等教育学科教授 佐藤 隆 / 4年 小林史佳

国文学科准教授 加藤敦子 / 3年 岩間雄星

英文学科准教授 奥脇奈津美 / 3年 鈴木 茜

社会学科教授 渡辺豊博 / 3年 石岡真由美

比較文化学科教授 伊香俊哉 / 1年 田中瑞綺

比較文化学科教授 山本芳美 / 2年 瀬川恵美

教育実習を終えて 17

初等教育学科3年 横澤修作

国文学科4年 立花大樹

英文学科3年 岡田 楓

社会学科4年 加藤崇矢

講演会だより 21

国文学科(春季講演会)

英文学科(英文学科・英文学会共催前期講演会)

大学院文学研究科(英語英米文学専攻講演会)

文大だより 24

合唱団 7年連続全国大会金賞及び文部科学大臣賞受賞

陸上競技部 全日本インカレ 入賞

準硬式野球部 関東甲信越大学体育大会 優勝

第42回鶴鷹祭開催

第60回桂川祭開催

夏季オープンキャンパス報告

秋季オープンキャンパス報告

前期修了者卒業式

「大学コンソーシアムつる」設立

岡崎朋美特任教授講演会(キャリア支援特別講演会)

県民コミュニティカレッジ「映画で学ぶ欧州小国の歩み」

現職教員教育講座

教員免許状更新講習

文大名画座(辻村深月氏トークイベント)

由紀さおり・安田祥子ファミリーコンサート

本 ぶんだい堂

お詫びと訂正

編集後記…奥脇奈津美 32

特集

創立60周年記念式典

10月10日（土）、都の杜うぐいすホールにて、都留文科大学
創立60周年記念式典を開催いたしました。

式典は、原喜雄同窓会長の開会の辞から始まり、学生歌「花のかげ」の奏楽、大谷哲夫理事長の式辞と福田誠治学長の挨拶が行われ、来賓の皆さまを代表して都留市長堀内富久様、都留市議会議員国田正己様、衆議院議員堀内詔子様、参議院議員森屋宏様にご祝辞を頂戴いたしました。その後、新ロゴの披露が行われ、新ロゴの制作にご尽力下さった金野雅治様への感謝状と記念品の贈呈、愛唱歌『都留は Universe』の作詞をされた海野剛様と作曲をされた山下祐加様への感謝状の贈呈と山下祐加様から福田学長に管弦楽譜、吹奏楽譜の贈呈が行われました。愛唱歌の初演では、合唱団

の歌声で始まり、2コーラス目からは、モダンダンスサークルが合唱団の歌声に合わせてダンスを披露し、クライマックスでは、オケピットに居る吹奏楽団も手拍子で演奏に加わり、総勢150名の学生たちがステージに登場し、パフォーマンスを披露しました。そして、新保副学長の閉会の辞が行われ、式典は幕を閉じました。

式典には500名以上の方々にご参加いただき、都留文科大学の新たな門出として相応しい式となりました。ご参加下さった皆様には、心より御礼申し上げます。



学生によるパフォーマンス



当日の会場の様子



創立60周年記念式典 式辞

公立大学法人都留文科大学
理事長 大谷 哲 夫

都留文科大学の創立60年を心から慶賀申し上げます。さて、本学は、昭和28（1953）年4月に山梨県立臨時教員養成所として設立され、昭和30（1955）年4月に都留市立短期大学に改編、昭和35（1960）年

4月には都留文科大学へ、さらに6年前の平成21（2009）年4月には法人化され、公立大学法人都留文科大学へと進展を重ね、本年創立60周年の記念すべき節目の歳を迎えました。

私たちは、この創立 60 周年という節目の歳にあたり、これまでの本学の歴史を鑑み、諸先輩方の輝かしい業績を称えるとともに、グローバル化、急進化している世界の趨勢のなかで、本年を法人化された利点を背景として、都留文科大学発展のための改革元年と位置づけ、本学をさらに飛躍させなければならないと考えております。

都留市は、本学の草創にあたり、市を「東京に近接する絶好の大学都市」と位置づけ、初代学長は「全国の文化と教育に貢献することは一大快事である」と述べたと伝えられます。また、都留市は、近年の高度経済成長期においても、自らの主たる役割を「教育」に確実に見定めて、次世代の教育者の育成に力を注ぎました。つまり、社会有考の人材を育成することを楽しむという校是である「箒莪育才」、才を育むを楽しむの精神を遺憾なく発揮し、その結果、本学は全国から優秀な学生を集め、教育者を育てる場を確立し、有為なる卒業生は教育現場ばかりではなく、社会のさまざまな場で活躍しています。今では、本学が都留市の大きな財産であり、地方都市に存在する大学の雄として希有な存在であることは周知の事実です。

しかし、現代の日本の大学における少子化の問題は極めて深刻で、全国の大学そのものが氷河期といわれた時代を通り過ぎて、地方の大学では、定員割れどころではなく、既に閉校に追い込まれている大学も出現し、大学淘汰の現象が顕著になってきている現実があります。そのような現状に鑑みると、本学といえども、時代を先取りした対策を怠るならばどのような事

態を招くか予想はできません。今後、都留文科大学は、法人としての組織機能の充実と堅実な運営の下で、「教育研究」では、新カリキュラムの実施に伴う教育の質的強化とそれに付随する各種センターの設置とそれらを集約する建物環境の整備。例えば今、新たな展開をしようとしている国際バカロレアを含む「(仮)国際教育学科」の新設など。「学生支援」では、学生へ奨学金の充実が勿論、国際交流をより実践的にするための独自の奨学金の導入とその展開。本学の学生と留学生とが日常的に異文化を共有しうる、60 周年の記念事業としての「国際交流会館」の建設。「地域貢献」では、都留市の CCRC (Continuing Care Retirement Community) 構想と綿密に連携して「大学 COC = 地 (知) を生かす拠点 = 推進機構」を充実させなければなりません。幸い、都留市の全面協力により、現今の駐車場、それに隣接する県の合同庁舎も、本学のキャンパスへと拡大する見通しも立っております。したがって本学は、大学と地域が融合したところに発生する知的財産を有効的に活用する場としての「知のフォレストキャンパス」として再構築し、真の総合的な学園都市を目指していきたいと思っております。

本学は、60 周年を期して、全国の文化と教育に貢献するばかりではなく、地方大学の雄として、先人に学び、世界への情報発信する、より以上の存在感のある大学へと展開しますので、皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。



創立 60 周年記念式典

あいさつ

公立大学法人都留文科大学

学長 福田 誠 治

本日、式典にお集まりの皆様、ありがとうございます。

また、壇上にご列席の皆様には、大学より深くお礼申し上げます。

諸先輩の方々のご努力と、市民の方々のご支援により、ここまでやってこれました。

思い起こせば、60 年前、この都留の地に大学を作ろうとした人々は、並外れたアイデアと不屈の闘志があったものと思います。その人々から見れば、今日の都留文科大学は夢のように見えるものと思います。

60 年たち、人生で言えば還暦なのですが、文字通り本学も大きな区切りに直面しています。それは、ベビーブームが少子化に、経済成長がバブル崩壊に、労働者人口の減少と共に高齢化社会にと、さまざまな条

件が大きく変化しています。その意味では、大転換の時期に日本の大学は入ってきました。本学が生き残るとすれば、本学が開拓した伝統に新しい道筋をつけること、恐らくそれは教員養成とグローバリズムを結びつけ、都留文科大学ならではの形を作るということに尽きると思います。これから、若者が生きていく時代は、国境を越えて就職していく世界になるはずですが、そのために、まず、本学では国際教育学科開設に向けて動き出しています。学部問題にも着手しなくてはならないと思います。どうか皆様、引き続きご支援ご鞭撻をいただけますようお願い申し上げます。まことに身震いする思いですが、大学のスタッフも奮起して、新しい時代を切り開いていこうと思っております。その決意をお伝えして、挨拶に代えさせていただきます。

新学章・ロゴの制作について

初等教育学科教授 鳥原正敏

本学の旧学章は平成元年、本学創立30周年記念事業の一環として制作されました。これまで旧学章と旧和文ロゴは、大学のシンボルとして定着し、教職員・学生をはじめ、大学関係者に広く愛されてきました。しかし、ICT技術やWebの出現など、この30年間に使用条件が変化したため、表示や視認性などの機能が低下しました。また旧学章には、旧和文ロゴと組み合わせたコンビネーションロゴや、欧文によるロゴの規定がなかったため、表示がまちまちになり、様々なコンビネーションロゴが派生し、イメージの統一性に課題がありました。

このような経緯を踏まえ、本学創立60周年事業として、現代的でありながら次の30年を見据えた機能と品位を持ち、しかも誰からも愛される新しい学章と和文ロゴ、欧文ロゴの制作に踏み出すこととなりました。なお、制作に関しては(株)クラブワークス金野雅治氏に依頼し、学内の取りまとめ役は鳥原正敏(本学初等教育学科教授)が行いました。

旧学章を現代のメディアに合うようフラットデザイン化し、Web環境などでの視認性が高くなるよう制作。それに伴い、新和文ロゴと欧文ロゴもこの手法に則り制作、さらに、これらを組み合わせたコンビネーションロゴを新設しました。一方、これまで愛されてきた隷書体による旧和文ロゴの文字は、当時、揮毫された宮澤正明先生(元都留文科大学助教授・現在山梨大学教授)に改めて制作を依頼し、同窓会のロゴとして定義。卒業生や本学の発展にご貢献いただいた教職員、関係者へ感謝の気持ちを表しました。スクールカラーについても新たにカラー設計を行い、スクールカラーの「TUエメラルド」とともに、教職員、学生、同窓会それぞれにサブカラーを設定。これまでのスクールカラーである紫味青色(群青色)のイメージは、サブカラーのひとつ「TUブルー」として継承することとしました。

こうした新しい学章・ロゴを誰もがわかり

やすく正しく使用できるように、使用方法などを定めたUIマニュアルを規定しました。UIマニュアルを遵守することで、新たな学章・ロゴの統一したイメージ保ち、さらに高めることを目的としています(詳細は本学UIマニュアルをご参照ください。)

本学創立60周年にあたり、ゼミ生などの学生と共に学章とロゴの制作に関われたことを光栄に思います。また、関係者一同、新しい時代にふさわしい学章・ロゴとなるよう精一杯、制作しました。文末ではありますが、本事業にご協力いただいた多くの方々に、心より感謝申し上げます。最後に、旧学章の制作に関わられた方々に、感謝と最大限の敬意を表したいと思います。

金野雅治氏を囲んで制作に関わってくれた学生と



和文ロゴ

都留文科大学

欧文ロゴ

TSURU University

同窓会ロゴ

都留文科大学

学章





都留文科大学愛唱歌 「都留は universe」誕生！

初等教育学科教授 清水雅彦

本年 10 月 10 日、都留文科大学創立 60 周年記念式典において、大学の新たな愛唱歌が初演披露されました。この誕生に至る経緯や思いは、記念誌にあわせて配布された記念 CD のジャケットの「都留文科大学創立 60 周年記念 愛唱歌と CD 制作にあたって」に次のように記されています。

『都留文科大学には創成期に制作された学生歌「花のかげ」（作詞：石村正二、作曲：近藤幹雄）があり、現在でも式典に於いて演奏されるだけでなく、全国の同窓会支部の集まりで歌われるなど、年代を越えた文大生に愛され続けています。創成期から大学の発展を祈り、力強く歌われているこの「生命の讃歌」に合わせ、第二学生歌とも言べき愛唱歌を作成しさらなる大学への愛好を深めたい、そうした思いからここに「都留は universe」が誕生いたしました。この愛唱歌は合唱版だけでなく、管弦楽版、吹奏楽版も同時に制作されています。さらにモダンダンスサークルには、演奏に合わせたダンスを創作していただきました。今後、多くの場面でこの愛唱歌が流れ、大学の現在（いま）と未来を繋いでくれることを確信しています。

なお 60 周年記念として、学生歌「花のかげ」の伴奏譜を作曲家・山下祐加氏に編曲依頼をし、学生歌、愛唱歌の合唱版とともにピアノ伴奏版を収録いたしました。この記念 CD が多くの皆様の愛聴盤となり、広く活用されますようお願いしています。

平成27年10月10日 都留文科大学創立60周年記念事業期成会』

作詞をされた海野剛（うみのごう）さんは、埼玉から都留文科大学英文学科に入学され 2003 年に卒業したご同窓です。2007 年詩のボクシング山梨大会優勝、2008 年国民文化祭「現代詩」知事賞、同年山梨日日新聞月間詩壇年間賞、2010 年文芸思潮エッセイ奨励賞、2011 年やまなし県民文化祭詩部門祭賞、2012 年やまなし県民文化祭エッセイ部門祭賞などを受賞。先の CD ジャケットには「母校の懐の深さを愛して」というタイトルの文章の中に「緑濃き山々に囲まれたこの大学に、門や扉はありません。誰でもいつでも出入りが出来ます。今日も多くの方々が出入りをし、大学と関わっていることでしょう。この懐の深さ、寛容性を、私は心から愛し誇りに思い、詞の中に込めました。」と思いを綴ってくださいしています。

作曲の山下祐加（やましたゆか）さんは、東京藝術大学音楽学部作曲科を経て、同大学大学院音楽研究科作曲専攻修了。作曲を尾高惇忠、日野原秀彦の各氏に師事。2011 年大学内にて新作オラトリオ『李陵』を初演、翌年、横浜みなとみらいホールで再演、2014 年混声合唱組曲『ねむりのもりのはなし』で

第 25 回朝日作曲賞を受賞、その組曲のうち表題曲『ねむりのもりのはなし』は 2015 年度全日本合唱コンクールの課題曲となるなど、お若くしてすでに将来を嘱望される作曲家の一人として活躍なさっています。「作曲に際して山々に囲まれた豊かな自然の中に建つ歴史あるキャンパスを散策し、温かい先生方や学生の皆さんと接する中でイメージを膨らませていきました。伝統を重んじ、勢いよく未来へ向かって進んでいくという思いを込めて作曲いたしました。」と思いをお寄せくださいました。

10 月 10 日記念式典内の贈呈式後に演奏された「都留は universe」（合唱：都留文科大学合唱団、ピアノ：十川菜穂（今年度初等教育学科専任講師として着任）、指揮：清水雅彦）は、2 コーラス目からモダンダンスサークルのダンスが加わり、終盤には式典の奏楽を担当した吹奏楽団のメンバーも参加し、学生総勢 150 名による華やかな初演披露となりました。この様子は都留市から毎月発刊されている「広報つる」の 11 月号に掲載され、学生たちの笑顔が輝いているステージ写真がその表紙を飾っています。合唱団は 12 月 13 日（日）にうぐいすホールで行われる定期演奏会に於いて、また管弦楽団も来年 2 月に「都留は universe」を演奏する機会があると聞いています。また大学 HP から楽譜もダウンロードできるようになりました。今後あらゆる場面でこの作品が愛唱されることを願っています。

都留文科大学愛唱歌 都留は universe

作詞 海野 剛
作曲 山下祐加

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 坂踏みしめて 仰ぎ見る | 互いの違いが愛おしい |
| 春の 私の 夢のはじまり | 大きな世界に あなたと、いる |
| 町縫う清水 鮮やかに | |
| 夏の 私の 胸のきらめき | welcome 誰にでも |
| | hometown 新しく |
| 互いの訛りが心地いい | entrance どこからも |
| 小さな日本に 私は、いる | そう 都留は universe |
| welcome 誰にでも | |
| hometown 新しく | “All The World’s A Stage” |
| entrance どこからも | 確かな現在を演じたい |
| そう 都留は universe | 遥かな未来を胸に抱き |
- | | |
|--------------|-----------------|
| 山並みはなお 染まりゆく | welcome 誰にでも |
| 秋の 私の 意志の深まり | hometown 新しく |
| 凛々しく富士は 聳え立つ | entrance どこからも |
| 冬の 私の 旅のはじまり | そう 都留は universe |

【未来を照らす記念誌】

60周年記念誌部会員
初等教育学科教授 藤 本 恵

私たち記念誌部会の編集した都留文科大学創立60周年記念誌には、「未来へのビジョン」というタイトルと、“Today and Tomorrow”というサブタイトルが冠されています。「50周年記念誌が過去を丁寧にふりかえっているので、60周年は未来志向の記念誌にしたい」という阿毛久芳部会長の意向に、部会員一同賛成して、上記のようなタイトルとなりました。タイトルを提案した部会員の加藤めぐみ先生（英文学科准教授）によると、“Today and Tomorrow”の原典は以下のような冊子だったそうです。

『現在と未来 (Today and Tomorrow)』は1923年から1931年にかけて、英国ラウトレッジ・アンド・キーガン・ポール社が発行した「未来へのヴィジョン」を語る読み物シリーズ。人文、社会、自然科学、あらゆる分野の専門家達が人類の未来を予測する小冊子が150冊出版され、戦間期の人々の知的好奇心・想像力を刺激した。

60周年記念誌は、20世紀イギリスの“Today and Tomorrow”とは時代も場所も異なる、現在の都留で編集されました。それでも、タイトルを引き継ぐに十分な照応性はあります。全学科の学生、教職員、世界で活躍する卒業生のみなさんに執筆を依頼した結果、「人文、社会、自然科学、あらゆる分野の専門家達」の文章が綺羅星のように並んだのです。現在の学生たちの生き生きとした活動記録、各学科やセンター等の現状を報告し、未来を予測する記事の他、卒業生へのインタビューや座談会記事、「記憶に残る学生群像」のようなコラムもあって、内容も文体も多様です。

こうした多様さを思うと、同時に、若い記念誌部会員の程原

祥子さん（総務課）の頼もしい姿が思いだされます。程原さんは数多い執筆者とのやりとりを一手に引き受け、落ち着いて対処されていました。同じく部会員の日向良和先生（情報センター准教授）は、卒業生インタビューのためにカメラを抱えて気仙沼まで出張しました。さらに、全体の装丁やレイアウトの決定にあたっては、豊富な知識をいかして熱い議論をされました。小林泰憲さん（副部会長）、宇佐美千里さん（総務課）は編集と印刷のスケジュールを作成し、予算を管理して、進行を支えておられました。堀内成寿さん（経営企画課）は、膨大な数の写真の管理をされました。

その結果、記念誌は充実した

内容をふくみながら、手に取って読みやすい軽さと、目で見ると楽しみのある冊子になっています。知っている人の写真や名前を探しながら、どこからでもよいのでページを開いてみてください。次から次へと「好奇心・想像力」がつながって、いつのまにか懐かしい都留、今の都留、これからの都留にいるような気持ちになれるはずです。表紙にデザインされた新学章やロゴ、愛唱歌とともに、記念誌が多くの卒業生、在學生、地域のみなさん、未来の文大生にまで広がり、都留を照らしていくことを願っています。



都留文科大学創立60周年記念誌

山中伸一氏の講演

「これからの社会と教育」を聴いて

都留文科大学副学長 阿毛久芳

山中伸一氏の「これからの社会と教育」と題した講演は、創立 60 周年を迎えた都留文科大学にとっての方向性と可能性を考える上で示唆あるものでした。

講演は「1、これからの教育を考える上で重要な社会の変化／2、日本の教育で気がかりな点／3、日本の教育の強い点／4、これからの教育改革の具体策」の 4 章構成で、それぞれの章には裏付けとなるデータが示されていました。

1 については、コンピュータの更なる浸透と現在ある職業の盛衰、気温の変動、日本の人口動向と自動車の海外販売台数の変化等、現状と予想される事態が語られました。今まで当然あると思っていたものが消滅し、新たに過酷な状況が現れてくる、いささか悲観的な衝撃を含むものもありました。2 についても日本の高校生“自信”意識の低さ、授業と宿題以外の勉強時間の少なさ、日本人の海外留学生の減少傾向等、ないない尽くしの元気の出ない現状が数値や図で伝えられました。

むろんこの悲観的な予想、状況を確認する意味は、それらに対して克服するにはどのような方策があるのか、解決への道をさぐり、果敢に実行することにかかっているのであって、そこには教育像、人間観が重要な起点としてあり、そこに光が当てられることになるはずです。

3 では OECD/PISA の 2012 年学力達成度調査 (15 歳児) においては、読解力、科学では世界 1 位、数学では 2 位。2013 年国際成人力調査 (16

歳—65 歳) においては、読解力、数的思考力が 1 位で、コンピュータ調査を受けた成人において IT を活用した問題解決能力は 20 (国・地域) 中 1 位、ただし、中・上位レベルの成人の割合は 20 (国・地域) 中 10 位。そして 21 世紀以後のノーベル賞受賞者数 (自然科学) がアメリカに次いで日本が 2 位となっています。一時、日本の順位が下がったことが話題になりましたが、これまでの教育の場にある人々のたゆみない努力があつてこそだとも思われます。今後もこのレベルが続くかは予断を許しませんが、一喜一憂することなく検証する冷静さが必要でしょう。それにしても 2 と 3 の落差は大きい。将来への不安を抱かせるものです。

『都留文科大学創立 60 周年記念誌』の「研究者」の欄に、ノースウェスタン大学医学系大学院及び附属ガン総合センター助教授の堀内大氏が、「米国でガンの研究に従事して」という文を寄稿しています。今井隆先生の指導の下、氏は英文学科を卒業した後、文系学生でありながら神戸大学理学部生物学科に編入学し、卒業後、分子遺伝学及び細胞生物学の分野 (インディアナ大学ブルーミントン校大学院) に進みます。そこからガン研究の最先端カルフォルニア大学サンフランシスコ校を経て、現職に就かれています。

異色な経歴ですが、「自分の今の能力で何ができるのか」ではなく、「自分は一体何をしたいのか」をモットーにしている、という堀内氏の言葉は、筋の通ったものであり、教育が与

えるべきもの、刺激すべきものを示唆していると思えます。

山中伸一氏の講演において 4 では現行学習指導要領の理念—確かな学力、豊かな心、健やかな体の統合体としての「生きる力」を育むこと。OECD の育成すべき資質・能力については、メタ認知“どのように省察し学ぶか”を基盤に、知識“何を知っているか”、スキル“知っていることをどう使うか”、人間性“社会の中でどのようにかかわっていくか”の統合体としての 21 世紀の教育を図示し、重なりを意識しながら総合的学習とアクティブラーニングの面から改革の方向性を示しています。

おそらく優れた教育には常にアクティブな要素が含まれており、そこから生み出される生き抜く力には、したいことを発見し、やり続ける意志と喜びがあります。

創立 60 周年記念式典では、愛唱歌「都留は universe」が都留文科大学合唱団とモダンダンスサークルと吹奏楽団とのコラボレーションにより披露されました。新たな大学を創っていくのだ、という創立期の若々しい思いが歌い込まれた「花のかげ」に対して、「都留は universe」は、初々しい入学の春からきらめく夏へ、意志の深まる秋から凛々しい富士に向き合う冬へ、そして新たな春へ旅立つ大学生生活の四年間が描かれています。愛唱歌は学生歌への応答の歌のように私には思えます。「確かな現在を演じたい／遙かな未来を胸に抱き」というポジティブな学生像がここには示されています。

山中氏が講演の終わりに、都留を故郷とする自身の深い思いを込めて、都留文科大学が培った教育と新たな挑戦に熱いエールを送ってくださったことを受け止め、「新たな歴史をおこす」決意としたいと思えます。

英文学科の Global Career Program (GCP) について

英文学科将来構想委員長

教授 今井 隆

グローバル キャリア プログラム (GCP) は、日本人として国際感覚を持ち、英語で自分の意見が言える、また、英語での交渉、英語でのプレゼンテーションの出来るグローバルシーンで活躍できる人材養成を目指すプログラムである。英語を学ぶのではなく、英語を通して様々な知識を学ぶことができるのがこの GCP の特色である。日本に関することを英語で説明することができるように英語による授業科目が用意されている。このような英語による科目が多くあるのが特色である。順次新しい科目の開講準備中である。

卒業後の進路に沿って3つのコースが考えらる。

- 1) 高度な英語コミュニケーション力と言語学・英語教育学・英米文化の知識を有する中学校、高校の英語教員や大学の研究者を目指す。
- 2) 高度な英語コミュニケーション力とグローバルキャリアの専門知識を有しグローバルシーンで活躍するビジネスパーソン、国際機関職員を目指す。例えば、国外の企業の社員、あるいは国連の諸機関の職員など。
- 3) 高度な英語コミュニケーション力と国際教養を身につけた企業の国際部門・国外の支店、航空・旅行・ホテル業界などで活躍する社員を目指す。

GCP の特色は、英語母語教員、日本人教員に関わらず英語での授業が多くあること。卒業までに英文学科主催の「英語圏事情研修」や「北米グローバルキャリア研



ネイティブの先生方

修 (準備中)」の参加や英語圏の大学への留学が含まれている。一般的には、1年次より高度な英語力をつけて、「英語圏事情研修」等に参加し、2～3年生のときに半年間の留学もしくは1年間の留学へとステップアップする。ただし時期は、自由なので4年生で留学する事も考えられる。留学先の大学で履修した科目は、単位認定面接を行ったうえで本学の科目に相当すれば単位認定されるので4年間で卒業出来る。2014度から留学奨学金の補助制度が

発出し補助金が出るようになった。卒業までに英検 1 級あるいは、TOEIC 850 点以上、TOEFL (PBT) 600 点以上を獲得する。このプログラム修了者には、修了証が与えられる。

以下に、このプログラムに指定されている科目を紹介する。今後科目は、さらに拡充していく予定で、英語母語教員による日本史、日本人の心、日本の伝統文化、現代日本の文化（アニメ論など含む）等の英語で行われる講義が順次、開講予定である。なお、英会話、英作文と英語表記の科目は、英語で授業がされる。日本語表記科目は、英語使用科目、英語・日本語両語使用科目を含む。

1. 英語コミュニケーション基礎：

英会話（上級）、英作文（上級）、LL 演習（上級）、TOEIC セミナー、TOEFL (IELTS) セミナーなど。

2. 英語コミュニケーション発展：

Discussion & Debate、English Presentation、Current Issues in the English Speaking World、ビジネス英語、英語圏事情研修など。

3. 英語コミュニケーション上級：

翻訳技法、通訳技法、上級特別英語演習、ビジネス英語（上級）
Media English（上級）、SNC (St. Norbert College) Intermediate English, SNC Advanced English, SNC International Education, UC (University of California) Program など。

4. 専門科目 基礎：

コミュニケーション概論、言語・文化、英語圏文学・文化概論、グローバルキャリア研究、Intercultural Communication など。



Gillies 准教授と一緒に

5. 専門科目 発展：

イギリス文化と社会、アメリカ文化と社会、アフリカ系アメリカ文学・文化、インド英語文学・文化、ジェンダー・セクシュアリティ、アジア・オセアニア文化と社会、心理言語学、社会言語学、応用言語学、語用論、言語・文化特別講義、Topics in Linguistics、Introducing Mt. Fuji、Introducing Japan、Introducing the Humanities (Olympics)、インターンシップなど。

GCP で履修する学生は、英語力向上のため、様々な催しに参加することが義務付けられており、英文学科将来構想委員会の委員を中心とする英文学科教員による丁寧なサポートが受けられる。例えば、すでに 2014 年度より始まった eSpace は、月曜から金曜までの昼休み時間及び 5 限以降に英語母語教員による英語で「なんでも話す場」として開かれており、GCP で履修する学生は、積極的な参加を促されている。

特集

文大に就任するにあたって

世界を広げるため



国際交流センター
特任講師
宮城春美 (スサナ)

10数年前、都留文科大学で第2外国語の授業でスペイン語を教え始めました。都留文科大学の学生と初めて出会った時、印象がとても良かったです。素直で真面目、とても純粋な若者達でした。

この若者達の力になりたい、教育したいという気持ちがより一層強くなりました。

大学の周りは自然も多く、通う度に私の心は平和で満たされたかのように感じ、心から愛が溢れる気持ちでいっぱいになります。

この場所は私にぴったりと勝手に思い込みました。

最初の授業をした時、今でもよく覚えていますが生徒は不思議な顔で授業を受けていました。

海外の事についてあまり知らず、海外の文化や言語の興味を持つ学生は多くなかったです。

その時代を振り返ると驚くことばかりだったことを思い出します。

国際問題の事について、世界でよく知られている有名人や場所を聞いても反応は無かった。

海外の同年代の若者は政

治、経済、国際問題、文化交流の事について語る事が出来るのに、日本では海外の情報は少ない。テレビの番組の影響でお笑い芸人の話しであれば、若者は元気になって語る事が出来た。

しかし、この内容は国際関係には通じない問題です。

第2外国語としてのスペイン語のコースでは、学生に海外の事について多く語りません。文化や有名人の紹介、国際問題の事について多く語り、学生に海外と日本の違いを調べて発表してもらいます。言語を学ぶ時、その言語の文化も学習する必要があります。

現在の若者には日本から出て、まわりの文化を実際に体験してもらいたい。そうすれば、自分の国の事も理解できると思います。外に出なければ気が付かないものがあります。

例えば、ある学生がスペイン留学に行った時の話ですが、大学で自分の国の文化を紹介しなければならないという課題があった時、私に連絡があり、その生徒は「日本には文化がない」と言って泣き出しました。「文化がない国はない」と伝え、日本の文化の説明をし本人はとても驚いていました。本人にとっては、当たり前の事であり、自分の国の文化である事に気づいていませんでした。

また別の留学先に行った学

生は、12歳の男の子に日本の政治家について聞かれ、何も答えられなかったことをとても悔しがっていました。このような場面は海外では沢山出くわすと思います。やはり海外に行かなければ、自分の国の大切な事に気が付かないでしょう。この世界はとても広いのだと沢山の学生に伝えたいと思い、今まで多くの学生の留学サポートを行ってきました。これからも学生にもっと海外の事に興味を持ってもらう為に、また日本もどんなに素晴らしい国であるかを気づいてもらえるように、他国及び日本の文化を考え理解できるように協力します。

私は長年、スペイン語とスペイン文化に触れてきました。日本の外務省、JICA、国際警察等にてスペインの文化関係の研究をし、資料を作り、生活や生き方の違いを学びました。

その知識を学生に伝えていきたいと思っています。これから、都留文科大学の学生の国際サポートをさせて頂きたいと思っています。

どうぞ宜しくお願い致します。



スペイン語クラスの様子

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

おもしろさを追究
すること

初等教育学科教授
佐藤 隆

教育学ゼミでは、昨年12月に引き続き、今夏も北海道のすぐれた教育実践に学ぶ旅を行ってきた。冬には若い教師たちの学びのサークルの「出発式」にも参加し、今日の難しい状況を教師たちがどのように受け止め、これを「乗り切って」いこうとしているのかにじかに接することができた。

今回は、こういう難しい状況だからこそ「おもしろさを追究することが教室を豊かにする」というのが持論の佐藤広也さんの教室を訪問し、子どもたちとそのおもしろさを共有した。

佐藤広也さんは「ほう、そうか探偵団」など、自分の実践にユーモアあふれる「名づけ」を行うことでよく知られているが、その内実は、子どもが好奇心を膨らませ自らものごとの本質に迫っていけるように、ち密に設計されている。今回、学生たちをともなって、佐藤広也実践の現場に立ち会うことができたのは本当に貴重な経験だった。

北海道・教育実践
学びの旅

初等教育学科4年 小林史佳



今年の夏、教育実践専攻教育学ゼミで「教育実践 学びの旅」として、北海道札幌市を訪問しました。昨年冬も北海道へは出かけたのですが、学生という立場での参加というところもあり切実なものとはなっていませんでしたが、教職に就くことがまじかに迫った今年は、昨年とはまた見えるもの、感じ方が異なる旅となりました。訪問前には、いま教育現場で起きていることや教師が直面している困難について学び直し、それを踏まえた上で北海道札幌市立栄小学校「佐藤広也学級（3年生）」を訪問し、広也先生の教室での実践を見せていただきました。

教室に入った瞬間に、広也先生独特の空間づくりがなされていることがすぐにわかります。子どもたちの書いたもの、作ったものがそこらじゅうに溢れかえり、これまで見てきたどの教室とも違った

く異なる広也先生と子どもたちだけの世界です。この空間の中で学ぶことは子ども達の安心や充実につながると感じられます。教室の中で子ども達はいきいきと学んでいます。

授業スタイルも独特です。子どもたちの書いてきた日記や、感じたことが描かれた自由帳が授業の出発点です。それが、ほかの子どもたちが調べたこと、感じたこととつなぎ合わされて授業の中で発展していきます。さまざまな発見や意見が飛び交い、それらを自分なりの「BOOK」にまとめていきます。授業の後の懇談会で、広也先生は「BOOK」について「自分たちの調べたこと、感じたことを書いていくんだ。探求的になってほしいからね」とおっしゃっていました。

私にとって、「ほんとうの学びとは何だろう」と考えるきっかけになった印象深い瞬間でした。教師がただひたすらに教えるのではなく、子どもたちが自分の意欲と力で、知識や大切なことを取り入れていくことを学びというのはないかと心の底から実感できたのです。

子どもたちに、広也先生の授業について聞いてみても「楽しい」、「面白い」と答える子がほとんど

です。自ら進んで学ぶ子どもたちを間近で見て、教師が自分の思いを込めて、いきいきと学べる空間をつくることのできるならば、これからの教育を変えることはできるのではないかとさえ思えます。

もうひとつ、なんといってもこの旅で良かったと思えたことは、ゼミの仲間で教育について、これまで以上に深くじっくりと考え、話し合うことができたことです。その日の夜には、広也先生に加えて、昨年冬に参観をさせてもらった太田一徹先生も合流してくださった懇談会がありました。お二人の現場のリアルな話を聞くことで私たちの議論もより深まったように思います。太田先生からは広也先生とはまた違ったかたちでの子どもたちに対する愛情がとても伝わってきました。

この旅は「教師」という仕事がとても魅力のある仕事であることをあらためて感じる事ができました。

教師になる上での不安はまだまだたくさんありますが、学ぶということを中心に楽しんでもらえるように、いきいきと進んで学んでもらえるようにと思いつけた4年間で培ったものを大切にしていけることを再確認できた旅となりました。



学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

浮世絵と和本に触れる



国文学科准教授
加藤敦子

近世ゼミの夏休みゼミ合宿は、毎年、学生の研究発表と江戸時代の文化体験を二本の柱としています。今年の文化体験は浮世絵と和本をテーマとして、浮世絵の美術館と浮世絵・和本の古書店を訪問し、学生の研究発表の合間にDVD映像で浮世絵の制作過程を学びました。ゼミ生たちには、今回の経験をふまえて、書物や授業で得た知識と目で見ても手で触れた江戸時代の「モノ」の実感と両方を大切にして研究を進めていくことを期待しています。



近世ゼミ合宿に参加して

国文学科3年 岩間雄星

私たち近世ゼミは、八月二十六日、二十七日、二十八日の三日間でゼミ合宿を行いました。内容は、各学年の課題発表を中心に、東京で江戸の文化について学ぶというものでした。

初日はまず、原宿にある太田記念美術館にて浮世絵の鑑賞をしました。美術館では、近世の文化や文学を理解していく上で非常に重要な浮世絵について、時期による作風の変化や使用されている技術が丁寧に解説されていま



和本と浮世絵に囲まれた貴重な経験でした。大屋書房さん、ありがとうございました！

た。知識のない私でも、非常に楽しめて勉強になる展示でした。その後、浜離宮恩賜庭園に移動し見学しました。浜離宮では自由行動でした。そこはかつて大名庭園だったので、私は大名や将軍が当時どのようなことを考えながらこの庭園を歩いていたのかを想像しながら散策しました。

二日目は、丸一日を使って今合宿メインの課題発表を行いました。四年生は卒論の進捗発表を、三年生は夏休み前に出された課題を発表し、設定された持ち時間を大幅に超えるほど、議論は盛り上がりました。普段のゼミでは授業時間が限られているため、意見を深めたり広げたりということがあまりできないのですが、合宿では時間を気にすることなく、それぞれの発表についてとても深いところまで議論できたと思います。四年生は卒論の方向性が、三年生



一日がかりの発表を終えて
全員笑顔で打ち上げ。

はこれからの調査について、とても勉強になる時間でした。発表会後のコンパでは、普段はなかなかできないような話をして親睦を深めました。

最終日は、神保町にある浮世絵・和本専門の古書店、大屋書房さんにお邪魔しました。大屋書房さんでは浮世絵などを加藤先生やお店の方の解説付きで見ることができ、学生だけではできないとても貴重な体験をさせてもらいました。

今回の合宿を通して、普段できないような体験をすることで、近世文学について深く理解することが出来ました。近世文学漬けだった三日間は、私たちにとって非常に有意義な時間になりました。この経験を今後のゼミ活動に生かしていきたいです。

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

多様化する海外 短期留学



英文学科准教授
奥脇奈津美

民間の留学エージェンシーでは、英語圏への語学研修にボランティア活動を併せたプログラムが用意されています。今回は、オーストラリアでの語学研修の後、現地の小学校で日本語教育のティーチングアシスタントをする、5週間のプログラムに参加した体験談です。英語学習をしながら、現地で子どもたちと触れ合っただけで教師体験もできる絶好のプログラムです。



学外で学んで

英文学科 3年 鈴木 茜

私は、今年の夏季休業期間を利用して、オーストラリアで短期留学をした。初めの3週間は語学学校へ登校し、2週間は日本語教師アシスタントとしてボランティア活動を行った。その間はホームステイをし、クイーンズランド州のブリスベンに滞在した。

語学学校は、ブリスベンのシティーに近い、International College of Queensland Australia、通称ICQAと呼ばれる学校へ通った。ICQAへは、世界各国から英語を学びに来た学生が通っており、夏休み期間にあたる日本人や台湾人、仕事

を求めて来たブラジル人がその多くの割合を占めた。中学生で短期留学をしている生徒、一度社会に出て退職して学びに来ている生徒、仕事を得るために英語を学んでいる生徒など、年齢や理由も様々だった。私は中級のクラスに所属し、現在完了や語法などを学習した。日本の高校レベルの文法だが、英語で習い、英語で質問し、英語で答えるとなると非常に難しい。日本での学習を復習するとともに、新たに英語で英語を学ぶことができ、さらに世界各国からの学習者たちと学ぶことは刺激的で、とても有意義な学校生活であった。

日本語教師のアシスタントボランティアでは、現地の小学校に配属され、日本語教師をしているオーストラリア人の先生に



語学学校にて

付き、サポートをした。活動内容は、単語の発音や文字の書き方、折り紙の仕方を教えるなど、クラスに合わせて様々だった。また、自己紹介のPower Pointを作成して持参した。簡単な日本語を使って、日本のお弁当文化(キャラ弁)を紹介すると、とても興味深そうに話を聞いていた。私は日本語教員になることを考えているため、将来を考える上でも非常に貴重な経験となった。

今回の留学を通し、様々な人々に出会い、異文化を体感することができた。自ら一歩踏み出したからこそできた体験だった。この経験を忘れずに、今後の生活に生かしたい。



ボランティア活動にて

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ



英国の市民社会 を学ぶ

社会学科教授
渡辺豊博

私のゼミでは、毎年、3年生を中心に英国の市民社会の仕組みを学ぶために、英国グラウンドワーク連合体や社会的企業を訪問しています。特徴は、具体的な活動現場に参加し、地元の学生や住民とともに草刈りや間伐作業を体験しています。英国の素敵な田園風景やミュージカルの観劇、パブでの人々との交流を通し、異文化と言語、国際感覚の重要性に気づき学習意欲への刺激を受けています。



英国グラウンドワーク スタディツアーに参加して

社会学科 環境コミュニティ創造専攻3年
石岡真由美



コッツウォルズで仲間とともに

9月10日～17日にかけて、社会学科、地域環境計画ゼミの渡辺豊博教授が取り組む「グラウンドワーク三島」の原点であるイギリスへ訪問しました。私は昨年もこのスタディツアーに参加しましたが、イギリスの先駆的な社会的取り組みに興味を持ち、さらに勉強したいと思い参加を決意しました。今回の訪問では、廃村になった田舎を社会的企業タウンとして再生し、地域の活性化に成功した「アムストン・ムーア」や英国ナショナル・トラストが政府から独立した独自の資金確保と管理システムにより保全している世界自然遺産の「湖水地方」や「コッツウォルズ地方」を散策しました。また「グラウンドワーク・ロンドン」が取り組む多様なブ

ロジェクトの視察と体験を通し地域における実践的な手法を学ぶことができました。

多くの刺激と学びの中で特に感じたことは、英国ナショナル・トラストやグラウンドワークといった市民社会(第三セクター)の存在が社会に大きな影響を及ぼしていることです。日本よりもはるかに上回る高度な組織力と市民の情熱によって、身近な問題から世界遺産の保全まで市民が主体となった取り組みを肌で感じることができました。「都市は都市、地方は地方らしく」という政策のもと、古いものほど価値をもち、もともとある自然や景観の保全と利用の調和のとれたまちづくりを市民の力によってつくりあげている様子を目の当たりにし、日本において地方再生を考える上で打開策になるのではと思いました。私自身、山梨県出身というもあり富士山が世界遺産に登録されて以来観光客や登山者が増加する一方でもともとある自然や地場産業など失われてしまうものもあることに危機感を持っています。富士山をどう利用し、保全して

いくのか、また私たち市民がどのように関わりを持っていくべきなのかをイギリスから学ぶことができました。地域社会を自らの手で変えていこうというイギリス人の情熱と、継続的な組織運営に魅せられたと同時に今後の日本における新しい地域社会の課題というものも発見することができました。

このように書いていますと堅苦しい研修のように思えますが、毎日研修後は自由に時間を使うことができ、観光地をまわったり、パブで現地の方とお話をしたり本場のミュージカルを鑑賞したりと肌でイギリスの社会と文化を味わいました。また他大学の学生や、年代を超えた参加者の皆さんとも交流することができとても刺激的な滞在となりました。なかなかできない貴重な体験と充実したイギリスでの研修は自分自身の国際的視野を広げ、また地元に対しても関心をもつ良い機会となりました。今回得たことを、今後の学生生活に存分に活かし励んでいきたいと思っています。



アムストン・ムーアでの視察

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

「日本の戦争を振り返る」



比較文化学科教授
伊香俊哉

今年度の比較文化学科スタディ・ツアーⅡは、戦後 70 年という節目を意識して、アジア太平洋戦争末期にアメリカ軍が対日爆撃の基地として使用した、グアム・サイパン・テニアンで実施した。猛暑の中、バンザイ・クリフなどの戦跡や戦争遺物を見学し、戦争の過酷さと虚しさを心に刻む旅となった。



比較文化学科スタディ・ ツアーⅡに参加して

比較文化学科 1 年 田中瑞綺

2015 年 8 月 29 日から 9 月 4 日まで、私たちはグアム、サイパン、テニアン島に滞在し、戦跡や戦争にかかわる場所を訪れた。私たちの滞在中はほとんど天候に恵まれたが、スコールが降ることもあり歩きにくい中ジャングルや海岸沿いを探索することもあった。トーチカや兵器、慰霊碑など戦争の記憶を今に伝えるものが町のいたるところに存在していることに驚いた。

観光地として人気のある今回訪ねた島々の目の前に広がる海は青く澄んでいてとても綺麗で、かつてその場所で悲惨な殺し合いが行われてい

たなんて想像もつかなかった。このスタディツアーを通して実際に現地に足を運んだ結果、戦争というものを今までより深く、また近くに考えられるようになった。しかしその反面、グアムのアサン海岸やサイパンのバンザイクリフ、テニアンのチュルビーチなど今では完全に観光地とされている場所も多く、恐ろしい戦争が起きていたという事実が忘れ去られていってしまうのではないかと不安になった。

私は今回現地を訪れて初めて、原住民であるチャモロ人が日本人によって大量虐殺されたという事実を知った。また、博物館にある展示物の説明文などで戦争に関してアメリカ側からの視点で書かれている文章を読めたのが良い経験だと感じた。小学生の頃から学校で歴史の勉強をしてきて多くのこ



テニアン島の原爆搭載ポイント

とを教わったように思っていたが、実際にはまだまだ知らないことだらけで教科書での勉強だけではわからないことがたくさんあるのだということを実感した。

朝起きてから夜寝る時まで一日中戦争の話をして過ごすということ自体が、私にとっては初めての経験だった。同年代の友人と戦争について深く語り合うことも普段の生活の中ではあまりない経験なので、新鮮な感覚だった。また、戦争を中心に歴史の勉強をしながらも、現地の人との会話などを通して英語の勉強もすることが出来た。今まで以上に戦争そのものに興味を持つようになり、そしてきちんと知っていかなければならないという思いが強くなった。自分にとってプラスとなる数多くのことを得ることのできた貴重な 7 日間だった。



サイパンの飛行場に残る旧日本軍戦車

学外で学ぶ

夏季休業を利用して学外で学ぶ

夏季休業を利用して
学外で学ぶ比較文化学科教授
山本芳美

比較文化学科のスタディ・ツアー（フィールドワーク旧カリ）Ⅲでは、沖縄の石垣島北部に1週間滞在しました。滞在先の明石は戦後に開拓された集落で、今年本学と同様に60周年の節目を迎えました。例年通り、島の人々からエイサーをはじめとしてさまざまなことを学びましたが、最も印象に残ったのは、最大風速71メートルの台風15号の直撃です。出発時から飛行機が着陸できるかどうか危ぶまれましたが、家や車が飛び、電柱がなぎ倒されての3日間の停電生活まで、台風で翻弄され続けたツアーとなりました。

スタディ・ツアーⅢを
通して学んだこと

比較文化学科2年 瀬川恵美

石垣島に対して抱いた最初の印象は、気候が暖かく独特の文化が芽生えた、人々の優しい土地である、ということだ。事前学習では、石垣島の歴史、沖縄本島の人々から見た石垣島への印象、そしてエイサーが今の形となるまでの流れを学んだ。事前学習で開拓時代についての記事を読んだことで、最初の印象は少しずつ変化した。さまざまな人たちが苦しみや悲しみを乗り越えた上に今の豊かな生活があるのだと、実際に滞在して地元の人々と交わることで理

解が一層深まった。

私が強く感じたのは、島という閉鎖空間から生まれる、この土地の人々の温もりである。沖縄にはイチャリバチョーデー（出会えば兄弟）と表現される、助け合いの文化が残っている。私たちの飛行機が台風15号の影響を受けながらも飛び、石垣島に着くとタクシーの運転手の方が、そして民宿では経営する鈴木さんご夫婦が私たち一人一人の手を取り、無事に到着したことを喜んでくれた。そのやさしさは、明石の人々全員に通じることであった。

運悪く上陸した台風は地元の人たちにとっても警戒度の高いもので、人的被害はなかったが、住居や停電などの被害が大きかった。鈴木さんご夫婦は停電に備えた色んな対策をし



お世話になっている「月桃の宿あかいし」前にて、恒例の記念撮影

て下さり、踊りを教えて下さった前栄城さんは、空いた時間を使って、私たちに踊りを指導して下さいました。大変な環境下でも人のことを思い、創意工夫や時間を有効に利用する発想のあるこの島には、内地の人々が忘れつつある思いやりの精神が溢れている。

また、エイサーの練習や「エイサーまつり」に参加させていただいたが、明石集落にとってエイサーは必要不可欠なものであると思った。仕事や進学のために島から離れた人たちがお盆の時期になると必ず帰省する。エイサーにより、年齢を越えたつき合いが生まれる。集落のほぼ全員が協力して一つの行事を成し遂げるのは、今ではまず見かけない光景のはずだ。それが出来る明石の人々は強い、と滞在を通じて感じたのだった。



前栄城玄三さんからエイサーを習う

教育実習報告



教育実習を終えて

初等教育学科 3年 横澤修作

8月末から4週間、母校の盛岡市立仁王小学校で教育実習を行いました。この4週間は、経験豊かな先生方に支えられながら、元気な子どもたちとともに、多くのことを学び、毎日が新鮮で、一日一日がとても充実した4週間でした。

4週間という短い期間のなかで、子どもたちに「先生に会えてよかったな」と思ってもらえるよう、「一緒にいる時間を大切にしよう」という気持ちを強くもちながら、実習に臨みました。休み時間は、できる限り子どもたちと一緒に遊びました。話をしたりゲームをしたり、体を動かしたりする中で、授業の中だけでは分らない人柄や友人関係、特徴、興味があること、流行っていることなど、子どもたちの様々な様子が見えてきました。授業準備などで時間に追われ予想以上に忙しい毎日でし

たが、時間を見つけ子どもたちと一緒に過ごす中で、信頼関係や児童への理解を少しずつ深めていくことができました。

私と同じ6学年配属の他の教育実習生の授業を見ると、自分には足りないところを見つけることができ、とても参考になりました。「自分も頑張らなくては」と思う一方で努力してもなかなかできない自分の力のなさを痛感し、焦りを感じる日々が続きました。なかなか上手くいかない授業づくりに悪戦苦闘する中で、私が子どもたちと沢山の時間を共有する中で少しずつ養われてきた、子どもたち一人一人との信頼関係や児童理解が、自身の授業づくりに大きく生かされてくるということを担当教諭の先生からご指導を頂きました。日常の子どもたちの様子や授業中の子どもたちの発言を想起しながら、子どもの目線

に立ち、「この子ならどう考えるだろうか」「この子はどんな風に発言するだろうか」「どうやったらこの子に理解してもらえるだろうか」様々なことを考えを巡らせて行くと、授業の流れや、様々な手立て、発問が沢山浮かんできました。

まとめの、体育の研究授業では「側方倒立回転」の授業を行いました。事前に担任の先生と子どもたちのマット運動の授業を参観するとともに、研究授業の前にアンケートを取り子どもたちのマット運動への取り組みを把握し、自身の授業で子どもたちにどのような手立てを行えば、よりよい授業を展開することができるのかを明確にしていきました。子どもの目線に立ち様々な手立てを考え、授業展開を考えることができました。

本当にうれしかったのは、側方倒立回転を苦手としていたS君が、授業時間中にどんどん上達し、まとめの発表でみんなの前できれいな側方倒立回転をしたことです。授業中に何度も何度も練習に取り組む姿、達成感にあふれた笑顔、成長した子どもの姿を見ることができ、私自身のことのようにうれしく感じるとともに、子どもの成長する姿を間近で見て、感動できる「教師」という仕事の素晴らしさを改めて感じました。

素敵な先生と子どもたち、互いに切磋琢磨し合った教育実習生、4週間の中での出逢いに感謝するとともに、たくさんの学びを大学での学習に生かし、努力し続けていきたいと思えます。



教育実習を終えて 子どもたちからのプレゼント

教育実習報告



教育実習を終えて

国文学科4年 立花大樹

私は5月末から3週間、母校である公立高校で教育実習を行いました。実習生は総勢21名とかなりの人数がいる中での実習となりました。

直前の打ち合わせで、私が一番苦手としている古文の授業を任せられ、不安を抱えながら実習が始まりました。はじめの3日間は先輩の先生方の授業を見学し、多くのことを学びました。大学の講義で学んだことを、実際に肌で感じることができたというのが最も大きな学びでした。まだこの時は生徒との距離感がつかめず、試行錯誤の毎日でした。

授業をするようになってから多くの変化がありました。まずは生徒から話しかけられることが多くなりました。実習に行く前から「高校生は授業をしっかりやればついてくる」と聞いていたので、生徒と関わることと同じくらい授業を大切に行うように心がけました。次に先輩の先生や同じ実習生の授業を見る目が変わりました。様々な角度から授業を分析し、いいところは積極的に私自身の授業に取り入れました。そのため、空いている時間は教科関わらず先生にお願いをして授業見学をさせていただきました。幸い

どの先生にも断られることなく、忙しくも充実した実習を行うことができました。

授業は1つの単元(5時間)を4クラス任せられました。実習生にも関わらず多くの機会を与えてくださった先生には感謝してもしきれません。一番苦労したのは授業の進度をそれぞれのクラスで合わせることでした。クラスや生徒の状況に合わせて臨機応変に対応するということができず、授業が終わるたびに反省をしていました。

実習を通して生徒と多く関わることができました。主に1年生で授業をしていたのですが、3年生の授業見学の際に大学の話をしてほしいと頼まれ20分ほど時間を頂いたり、2年生全員の前で進路決定に関する講話をしたりと、

学年関係なく生徒と話すことができました。それでもやはり、1年生とは特に話をするように心がけました。掃除の時間や昼休みはもちろん、放課後や授業の合間のちょっとした時間でも、とにかく暇があれば教室に足を運んでいました。生徒を知るにつれ授業に変化が生まれました。こういった点に私は教員という仕事の魅力を感じました。

教育実習では非常に充実した時間を過ごすことができました。嬉しかったことと同じくらい悔しい思いもしました。しかしそれはネガティブなものではなく、これから教員になるうえでの課題として考えています。未熟なのは当然で、一人前にはまだまだほど遠いと思います。しかし、教員という仕事に対する情熱や教員を目指すうえでの原動力を得たということでも有意義な教育実習といえるのではないのでしょうか。

これからの人生で忘れることのできない経験に感謝し、教員という夢に向かって努力を続けたいと思います。



実習の様子

教育実習報告



教育実習を終えて

英文学科3年 岡田 楓

今年の夏、母校の中学校で3週間の教育実習をしました。今振り返ると、大変なことも多かったはずなのに、不思議と良い思い出と生徒たちの顔ばかりが浮かんできます。英語の授業を通して、日々の生活を通して、毎日が新たな発見の連続で、狭くはないと思っていた自分自身の視野と考え方を見つめ直す良い機会となりました。

実習初日、私は自分が「教育実習生」であるという気持ちで母校に向かいました。しかし、生徒に「楓先生」と呼ばれ、まっすぐな瞳を向けられ、私は彼らにとって「教師」の一人なのだ実感しました。そして教師に一番必要なことは、生徒との信頼関係

を築くことだと、実習を終えた今は思います。

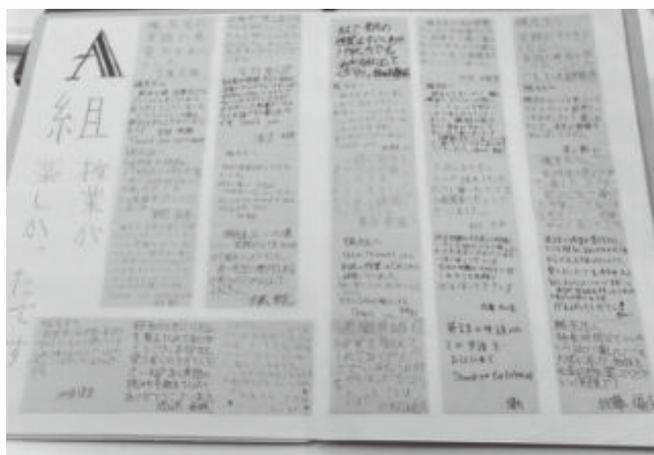
授業では、技術や知識は大切ですが、そのとき目の前にいる生徒に、いかにぴったり合うものを作るかが何よりも大事であると気づきました。実際の授業は常に手探りででした。生徒が何につまずくのか、どのような活動を楽しんでくれるのか、生徒の顔を思い浮かべながら毎日指導案を練りました。また、担当クラスでは、短学活など、担任の仕事をいくつか任せていただき、教師の仕事量の多さも体感しました。

私の地元は被災地でもあります。地元を離れて3年、私の中で忘れてかけていたものがいくつもあったと気づかさ

れました。校庭一面の仮設住宅、スクールバスでの登校など、「普通」ではない環境での学校生活です。授業で扱う材料も、とても細やかな配慮が必要とされます。「復興教育」というものを肌で感じ、学びました。

校長先生をはじめ、母校の先生方から伝えられたことがあります。「生徒とできるだけ多くの時間をともに過ごしてください」という言葉です。それ以降、私は生徒と一緒にいる時間をつくることを第一に実習を行いました。登校してから朝の短学活前の時間、給食や部活動、放課後の生徒の見送り、家庭学習や生活記録ノートへのコメント書き。過ごす時間に比例して生徒との関係も深まり、日を追うごとに、その言葉の深さを実感しました。

想像以上の経験をした今回の実習は、今も大学生活の大きな力になっています。今後も生徒たちに恥じない自分でありたいよう、日々努力していきたいです。



生徒たちから送られてきた寄せ書き

教育実習報告



教育実習体験記

社会学科4年 加藤崇矢

私は今年の6月に、教育実習を行いました。私の地元の自治体は、母校での教育実習を禁止しているという珍しいところだったため、私は自転車で30分かかるところに位置する中学校に、3週間お邪魔しました。私は高等学校の教員志望でしたが、中学校の教員免許も取得したいと考えたため、中学校での教育実習を希望しました。

実習で、教員としてのスキルを磨きながら、自分が本当に将来教員として働くことに向いているかを確認するための教育実習でもありました。

生徒たちは私が実習に来たことを大いに歓迎してくれました。3週間の期間中は、休憩時間に生徒とたくさん話すこと、授業を通してコミュニケーションをとることも多かったです。コミュニケーションを通して、現在子どもたちが興味を持っていることは何かを把握することが、子どもと関わる上で大切だと考えました。

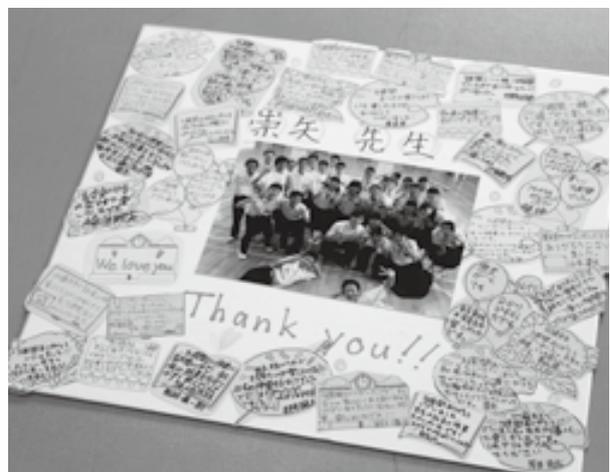
私にとって、教育実習の大きな経験は授業実習でした。1週目の水曜日から社会科の授業を任されるようになり、2年生4クラス分を授業することになりました。私が授業を行った回数を後で数えてみると、26回に及びました。指導内容は、歴史の単元の江戸中期を担当させていただきました。毎日授

業が3時間ほどあり、多い日には1日で4クラスすべて授業を行いました。そこにおいて大変だったのが、教材研究でした。どのように指導すれば生徒に知識が定着するか、わかりやすい授業を展開するにはどうすればよいかなど、考えればたくさん出ますが、教材研究を怠ってしまうと授業が台無しになると思い、毎日自宅に帰ってからは板書案や発問、教科書や資料集の読み込みを熱心に行いました。授業は最初の頃は、どのように展開すればよいか模索しながらやったため、満足のいくものではありませんでした。毎回授業を行った後は、指導教官の先生に改善点や良かったところを述べていただき、次の授業に生かそうとしました。そうしたことを繰り返していくと、次第に授業構成がうまくいくようになり、生徒から、授業がわかりやすかったという声が聞けるようになりました。

3週目に社会科の研究授業があり、私の授業を多くの教員方に見ていただきました。研究授業は、教育実習の総まとめと言っていいほど

重要なもので、教育実習で何をやってきたのかを発揮する授業です。もちろんいろいろな方に見られるので緊張しましたが、生徒と一体となって授業を行い、授業で到達しようとした目標は達成できませんでしたが、後で指導教官に、とても生徒に問題について考えさせることができた授業だったという言葉いただきました。

3週間は実習を行うと非常に短いもので、教員としてのスキルは短期間では向上させることは難しいです。しかし、私は教育実習によって教員になりたい思いがより一層強くなり、今年の教員採用試験を受験しました。そして結果は合格したため、来年度から愛知県高等学校地理歴史科の教員として採用されることが決定しました。私は教員になるための勉強を3年生の時から継続して行ってきました。そして、教員になってからも日々勉強を怠らず、立派な教員になろうと努力します。



実習先の生徒から送られた色紙

講演会だより

国文学科 2015 年度春季講演会

食いしん坊クマさんにかたとカナの歴史物語へと 誘^{いざな}われたひととき

～〈かな〉と〈カナ〉のものがたり：日本語学史工房への招待～

2015年6月3日(水)

講演者 山田健三先生

「おいしいものを食べるのも作るのも好き」と自己紹介し、壇上をクマのように歩き回りながら熱く語る山田先生。聴衆は一気に惹き込まれた。「顔がとても大きい」言語学者河野六郎の「日本語は文字研究に適した土壌」との見解を引き、そんな日本にも幕末・維新の頃前島密「漢字御廃止之議」をはじめとした文字使用の合理化＝効率化を目指す主張があったことを紹介、その背景に日本の東アジア漢字文化圏から西欧列強表音文字文化圏へのシフトがあったことを説明する。

以下話は日本語表記史における多種文字使用（漢字・かな・カナ）の経緯へと転じ、

漢字・カナ文＝公的・対外モード、かな文＝私的・国内モードとの二種のモードが存在したが、後にカナ専用文も成立し、かなとカナ両者の文字的価値は時代により変容していくと述べる。

ここでそもそも文字は言語そのものではなく、音楽にとってのCDのように言語を記録・再生するためのメディアであり、CDにレコーダー・プレーヤーが必要なように、文字にも言語情報を記録・再生するための書記システム（書記法・文法・句読法など）が必要であるとする。

話を戻して、日本国憲法成



講演の様子

立前後に〈漢字カナ〉と〈かな漢字〉の二つの書記モードの時代から現行の〈かな漢字〉だけで公私両用する書記モードへの変化があったとし、我々が以前の日本人のように書記モードの違いを感じることができなくなったことを指摘。そのうえで「大福光寺本方丈記」を示し、なぜこれがカナ専用文で書かれたかを宿題として問いかけて、講演を閉じられた。

今回久しぶりに「国（日本語学）」に関する講演を企画した。短い時間であったが、普段は意識しないかなとカナの違いに改めて気づかされ、その歴史に深く考えさせられたひとときであった。（加藤浩司記、本学「国文学会」の「会報」131号も参照ください。）

講師紹介



山田 健三（やまだ けんぞう）

信州大学学術研究院（人文科学系）教授。愛知県名古屋市出身。最終学歴名古屋大学大学院文学研究科博士課程。日本語史研究全般を研究分野とするが、近年は特に日本語書記技術史に関する研究活動を行なっている。主な研究業績は「連綿句読法—書記システムの記述方法をめぐって—」（『信州大学人文科学論集』2, 2015-3）、「仮名をめぐる歴史上の書記用語・再考」（『日本語学』32-11, 2013-9）、「係り結び・再考」（『国語国文』73-11, 2004-11）、「しほといふ文字は何れのへんにか侍らん—辞書生活史から—」（『国語国文』68-12, 1999-12）、「日本古辞書を学ぶ人のために」（西崎亨編、世界思想社1994）。

講演会だより

平成27年度 英文学科・英文学会共催前期講演会

『シンガポールの教育事情』

～幼稚園・小学校の授業風景から考える～

2015年6月17日(水)
講演者 池田充裕氏

今回の講演会では、長年シンガポールについて研究してきた池田充裕氏が、シンガポールの歴史や文化を解説しながら、教育事情とその背景についてお話しして下さった。

池田氏は、当初は中国文化の研究をしていたが、天安門事件の影響によって中国本土の研究が難しくなってしまった。しかし、中国語に関わる研究がしたかった池田氏はシンガポールの研究を始め、1995年に文部省派遣留学生としてシンガポール国立大学(National University of Singapore NUS)に2年間留学した。留学中は中国人の家庭に下宿しながら大学へ通い、中国人の生活習慣や文化も学んでいった。NUSでは教育について研究するとともに中国語も学び、世界中から集まった学生と共に勉強していたとおっしゃっていた。

池田氏はまず初めにシンガポールについてお話しして下さった。シンガポールは、国土面積が東京23区ほどでありながら、その中に華人系、マレー系、インド系などの多様な民

族、文化が混在している。人口は549万人で、そのうちの約3分の1が外国人と、グローバル化が進んでいる。シンガポール建国当初は、各民族、宗教が異なり、互いの価値観をすり合わせて国民意識を形成することが第一の課題であった。植民地時代は、各民族の有志が学校を作り、それぞれの言語で教育をしていたが、シンガポール建国後は政府が英語と各民族の母語を習う学校の設置を始め、子どもたちがそこで勉学に励むように指導した。池田氏はシンガポールの国営マンションに住んでいたそうだが、インド系、中国系、マレー系といった異なった民族や宗教の人たちが1つのマンション、1つのフロアにすんでいるのは世界的に見ても大変珍しいとおっしゃっていた。世界では民族ごとに分かれて居住しているが、シンガポールでは地域ごとの人口比を均等にするため、各民族の居住は政府が管理している。このようにシンガポール政府は多民族社会の形成を後押ししていることが分かる。

近年シンガポールは特に教育分野で関心を集めている。池田氏は、TIMSS(基礎学力を図る、算数と理科について問われる)やPISA(思考力を問われる)といった国際学力調査についてお話して下さった。近年のTIMSSの結果を見てもシンガポールは1位、2位、1位と上位に位置し、ますます注目を集めている。池田氏にも日本国内からシンガポールの学力に関する問い合わせが来ることもあるそうだ。また、英語についても、シンガポールはTOEFLでオランダに次ぐ2位と、その英語力の高さに驚かされる。シンガポールの英語力の高い背景にあるのが、建国当初から行っている二言語教育(Bilingual Education)政策であると、池田氏はおっしゃっていた。また、政府によるキャンペーン活動(きれいな英語を話そう運動等)の例などについてもお話して下さった。シンガポールの幼稚園の授業風景のビデオからも、英語はもちろん様々な言語を同時に学んでいく様子がうかがえる。小学校では教科によって使用言語が分けられており、時間割の例にも、バイリンガル教育の真髄が表れている。

そしてシンガポールのもう一つの教育政策として挙げられるのが、実力主義の教育政策である。シンガポールは、試験による能力選別があり、小学校卒業試験(PSLE)や普通教育修了資格(GCE)といった試験のほか、幾度もの厳しい試験を受けなければならない。これにより、生徒達は能力別に振り分けられてしまうが、使用する教科書、授業レベル等が細かく分けられているため、落第者は少ないという。

池田氏は今回の講演会で、シンガポールの社会について自身の体験を踏まえた上で、日本との比較も交えながらシンガポールの教育事情についてお話して下さった。シンガポールの学力、英語力の高さには大変驚かされた。しかしそれは厳しい実力主義の教育政策に裏打ちされたものだということを知ることができた。シンガポールの教育事情を知ることができたということだけでなく、自身の教育について考える良い機会にもなったと私は考えている。

(1年 井口雄介)

講師紹介



池田 充裕 (いけだ みつひろ)

専門分野：比較教育学、国際教育学

山梨県立大学人間福祉学部人間形成学科助教授。山形県酒田市出身。筑波大学第二学群人間学類(教育学専攻)卒、同大学院博士課程教育研究科単位取得退学、文部省アジア諸国等派遣留学生として、シンガポール国立大学に留学の後、日本学術振興会特別研究員、山梨県立女子短期大学を経て現職。

主な著書・訳書・事典

- 『アジア・オセアニアの高等教育』馬越徹編著(担当:第5章「シンガポール—グローバル化に挑む高等教育改革」)2004年
- 『世界の教員養成I アジア編』日本教育大学協会編(担当:第6章「シンガポールの教員養成」)2005年
- 『諸外国の教育』学校教育研究編(担当:第13章「シンガポール」)2006年

講演会だより

平成27年度 英語英米文学専攻講演会

『内なる変化の必要性』

2015年7月14日(火)

講演者 クラウディアス・クレイボーン教授
(Prof. Claudius Claiborne)

講演会の様子

7月14日に、テキサスサザン大学のクラウディアス・クレイボーン教授を講師に招いた英語英米文学専攻の講演会に参加し、貴重なお話を聞くことができた。講演では、教授自らの学生時代の経験を中心に、絶えず変化していく世の中に対して、我々がこの先どのように生きていかなければならないかが語られた。

バージニア州ダンビルという敬虔な黒人コミュニティがある町で育ったクレイボーン教授は、アメリカで公民権運動の最中の1965年、アフリカ系アメリカ人の入学が認められたばかりで、その数はほんの数名程度というデューク大学に入学した。勉学に精を出す一方、白人社会の偏見のまなざしや差別に苦しんだと

いう。しかし、このような厳しい境遇に置かれていた故に、圧倒的マイノリティであった黒人学生同士の絆も強く、差別を乗り越え、彼はデューク大学のバスケットボール・チーム「デューク・ブルーデビル」における初の黒人選手になった。チームのメンバーとしてバスケットボールの技術を磨くことはもちろん、彼は選手としての向上心やマナー、チームと様々な物事を共有すること、何かミスが起こった時に臨機応変に対応する術、誇りを持つこと、つらくても笑うことといった、人と関わっていく上で大切なことを学んだと語ってくれた。その後も同胞のいないノースカロライナ州ダラムに移り住み、現在に至るま

で多くの人種的苦難を乗り越えてきたクレイボーン教授は、このような経験をしたからこそ、自分のルーツに誇りを持てるようになったという。

クレイボーン教授の講演を聞いて、世の中にはあらゆる形で理不尽なことや差別が存在するが、しかしそれと同時に変化も絶え間なく起こっていると感じた。そして、世界をより良くしていくためには、まず自らの内なる部分に目を向け、変化を受け入れる覚悟をする必要があることを学んだ。世の中の変化を受け入れ、内なる変化をもたらすのに必要な第一歩を踏み出すため、私たちは努力をしなければならない、そう感じさせる講演会であった。

(英語英米文学専攻

1年 棚田 真理・著

2年 地下友梨奈・訳)

講師紹介

クラウディアス・クレイボーン教授
(Prof. Claudius Claiborne)

アメリカ出身。ノースカロライナ州デューク大学卒。テキサスサザン大学で経済(マーケティング)を教える。フルブライト研究者として2015年来日。経済学について講義を行う一方、黒人バスケットボール選手のさきがけとなった自身のキャリアについての講演も行う。

文大だより

都留文科大学合唱団 7年連続の金賞及び文部科学大臣賞を受賞

都留文科大学合唱団は、2015年11月21日（土）に長崎市・ブリックホールで行われた「第68回全日本合唱コンクール全国大会 大学職場一般部門 大学ユース合唱の部」に於いて、金賞及び部門第一位に贈られる文部科学大臣賞を受賞、あわせて来年鳥取市で行われる全国大会へのシード出場権をいただきました。これにより、都留文科大学合唱団は全国大会において、7年連続で金賞を受賞いたしました。



都留文科大学合唱団

陸上競技部 日本学生陸上競技対校選手権大会で入賞

9月11日（金）～13日（日）にヤンマースタジアム長居（大阪）で実施された日本学生陸上競技対校選手権大会（全日本インカレ）において、本学の陸上競技部員が入賞しました。走幅跳の二宮聡史さん（初教3年、岡崎北高出身）が7位入賞、女子4×400mR（園田可南子さん（初教3年、海南高出身）、出塚千恵さん（初教2年、新潟明訓高出身）、池嶋祥子さん（初教4年、柏崎高出身）、堅田悠希さん（初教1年、田辺高出身））が6位入賞の成果を収めました。二宮さんは、本学陸上競技部の男性部員では初となる全日本インカレでの入賞者となりました。



都留文科大学陸上競技部

準硬式野球部 関東甲信越大学体育大会 優勝



閉会式後のグラウンドでの集合写真

8月16日～31日の期間で実施された関東甲信越大学体育大会の準硬式野球の部において、本学準硬式野球部が優勝しました。栃木県総合運動公園野球場で行われた決勝戦では、2回に6点を先制するなど、合計14対6の大量得点での勝利で、みごと優勝を飾りました。

文大だより

第42回鶴鷹祭開催

6月20日(土)と21日(日)の2日間にわたり、都留文科大学において『第42回鶴鷹祭(都留文科大学・高崎経済大学総合体育対抗戦)』が開催されました。

鶴鷹祭は平成27年で42回目を数えますが、前回の第41回までは本学の23勝16敗2分けと勝ち越しており、また過去3年間は都留文科大学が勝利を収めております。

そのような状況で、4連覇をかけた本学は『一勝懸命』を、対する高崎経済大学は連敗を阻止するべく『不屈～全員でつかむ意地の一勝～』をそれぞれスローガンに掲げ、各々の競技で熱い試合が繰り広げられました。



達磨開眼



成績発表



応援団

2日間の激戦の末、『都留文科大学11－9高崎経済大学』の僅差で本学が勝利を果たし、4連覇を達成する形で今年の鶴鷹祭は幕を閉じました。

開会式では、伝統となっている両校の応援団によるエール交換、本学のモダンダンスサークルによるチアリーディングなどが行われ、大会に華を添えました。競技が始まると、自大学の勝利のため、全力でプレーする選手達の声やそれを応援する仲間たちの声で会場が活気づきました。また、閉会式では、残念ながら今回は参加することができなかった部の学生たちからのメッセージビデオが流され、会場の一体感がより一層高まりました。この大会を通じて得た仲間との絆は、運動部に所属する本学の学生にとって、かけがえのないものになると思います。

来年度は舞台を高崎経済大学に移し、再び熱い試合が繰り広げられることでしょう。両学の奮闘に期待します。

文大だより

第60回桂川祭開催



「学長と鍋しよう!!」の様子

趣向を凝らした開会式でのバルーンリリースから始まり、学内の各団体による模擬店や60周年記念作品展及び大道芸人によるパフォーマンスやお笑い芸人「レイザーラモン」や「なだぎ武」によるライブなどが行なわれ、会場は大いに盛り上がりました。

恒例の「学長と鍋しよう!!」では、学生の作ってくれた美味しい鍋を食べながら、福田誠治学長と多くの学生が1時間ほど交流を楽しみました。学生にとっては、普段は交流することが少ない学長を身近に感じるとともに、今後の人生において役立つ話を聞くことができる良い機会となりました。

2日目には動物園企画の「つるどうぶつのもり」も開催され、小さなお子さんを連れたご家族も多く来場し、文大生だけでなく市民の方々も楽しめるイベントとなりました。最終日の閉会式では、多くの来場者の見守るなか、夜空に華やかな花火が打ち上げられ、3日間の幕を閉じました。発表する催し物の練習や、各種準備のため、多くの学生が連日遅くまで一生懸命作業をしていました。また、「ごみの分別徹底」や「酒類購買者への年齢確認の徹底」など、実行委員が様々な取り組み・工夫をしたことで、ルールが守られた楽しい時間を過ごすことができました。来場いただいた方を含め、すべての参加者の力を合わせたことにより、華やかで活気ある桂川祭にすることが出来たのではないのでしょうか。

10月31日(土)から11月2日(月)までの3日間にわたり、第60回桂川祭が多くの市民も参加するなか盛大に開催されました。今年のメインテーマは『百華繚乱』。「60周年という節目として花が咲き乱れているような、華やかで活気のある桂川祭になるように」という意味が込められています。



屋内ステージでの音楽ライブの様子



実行委員長

《桂川祭を振り返って》

本年度の第60回桂川祭は、10月31日(土)から11月2日(月)の3日間行われました。「百華繚乱」をテーマに掲げ、様々な催しをご来場の皆様楽しんでいただけたと思います。参加して下さった皆様と共に、華やかで活気ある桂川祭に出来たと感じております。最後になりましたが、大学関係者の皆様、地域の皆様、学生の皆様のご協力のもと無事に全日程を終了することができました。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。

第60回桂川祭実行委員会 委員長 滝澤 亮

文大だより

夏季オープンキャンパス報告

7月18日(土)に平成27年度夏季オープンキャンパスを開催しました。今年は台風11号の影響で交通網が乱れる中、1856人と大変多くの方にご来場いただきました。北は北海道、青森、岩手、秋田から、南は沖縄や鹿児島、熊本からと、全国各地から遠路はるばる本学にお越しいただき、大変ありがたいことだと感じています。

当日は、大学概要説明会や各学科の説明会や特別講義、個別相談会などに加えて、学食体験やキャンパスツアー、部活やサークルによる演奏・演技など多くの催し物が開催され、大いに賑わいました。その中で一つ悔やまれたのは、英文学科と国文学科で学科説明会と特別講義の参加者が予想以上に多く、立ち見や一部教室に入りきれなかった方がいたことです。せっかく来場して下さった方々に不快な思いをさせぬよう、来年度以降はしっかり対策を講じたいと考えます。

参加者からは「国際関係の学びや自然に恵まれた立地で、この大学で学びたいと感じた」「特別講義が楽しく、より一層この大学に入りたいという思いが強まった」「先生方や学生さんがとても優しく丁寧に対応してくれ、この大学に通いたいと思った」など好意的な意見が多数寄せられました。

当初心配していた“台風による開催中止”や“台風一過の猛暑”にもならず、曇り時々小雨という天候の中、大過なくオープンキャンパスを終了できたのは、この日に向けて準備を重ねて下さった教職員の皆様、学生の皆さんのおかげです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(広報委員長 別宮有紀子)



説明会の様子。



個別相談会の様子

秋季オープンキャンパス報告

本年度で第8回目となる秋季オープンキャンパスを、10月12日(月)から23日(金)までの8日間(水・土・日曜日を除く)にわたり開催しました。

昨年度は台風接近の影響により、やむなく中止となった日程もありましたが、本年度は天候に恵まれ、多くの高校生・保護者が本学を訪れました。



キャンパスツアーの様子

主な内容として、公開授業(90分)への参加、個別相談会、学生の案内によるキャンパスツアー、無料学食体験などを実施しました。

参加した受験生の総数は延べ388名と、昨年(304名)に比べて80名ほど多くの受験生が参加しました。県内からの参加者は106名と昨年の123名からわずかに減少しましたが、県外からの参加者が281名と昨年度の181名から100名の増員となりました。

恒例となったキャンパスツアーでは、本学学生がガイド役となり案内をしました。保護者も含む参加者に対し、キャンパス内の施設などをグループで回り、丁寧に説明していました。参加者からは、「丁寧に案内してくれて都留文科大学の魅力がとてもよく伝わった」、「フレンドリーな雰囲気でしたので質問がしやすかった」等の声が聞かれ大変好評でした。



個別相談会の様子

また、その他にも「教員になるための勉強をする環境が整っていると感じた」、「自然が豊かなキャンパスが魅力的で、学生がとても親切だった」、「都留文科大学で学びたい気持ちが一層高まった」といった感想が多く寄せられました。アンケートでは、今回秋季オープンキャンパスに参加した生徒のうち、7割以上が本学の受験を決めており、非常に熱心に講義や相談会に参加しておりました。

文大だより

前期修了者卒業式

9月30日(水)、本部棟3階大会議室において、平成27年度前期修了・卒業証書の授与式が執り行われました。

今年度は9名の学部卒業者と1名の大学院文学研究科卒業生のうち、7名が出席しました。

当日は、担当教員をはじめ多くの教職員が見守るなか、福田誠治学長より1人ひとりに卒業証書が授与されました。

その後、学長から卒業生に「送ることば」として激励や祝辞が贈られ、卒業生たちの前途を祝しました。



前期卒業式の様子

「大学コンソーシアムつる」設立理事会及び 設立記念セミナーが開催されました！

平成27年10月22日(木)に都留市と都留文科大学、健康科学大学、山梨県立産業技術短期大学校による「大学コンソーシアムつる」が設立されました。

都留市には、都留文科大学、県立産業技術短期大学校に合わせ、平成28年4月に健康科学大学看護学部が開設され、市内に3つの高等教育機関が存在することとなります。都留市と、この3つの高等教育機関が連携体制を築き、アドバンテージを活かした魅力ある教育環境の整備を進めることで、学生を含むすべての市民に対し、より価値が高い学習活動の場を提供するとともに、社会の成熟化に伴う学習需要の増大や急激な社会変化に対応するための生涯学習、産官学民の地域交流の推進などを図り、更には、3大学・大学校間における相互練磨を行うことにより、それぞれがより一層特色と魅力あふれる教育機関となることを目指し、設立されたものです。

今後は、設立理事会で決定された事業計画に基づき、各種交流・連携事業などを推進していくとともに、都留市が計画している「大学連携型CCRC構想」の大きな役割を担うことも期待されています。



「大学コンソーシアムつる」設立記念セミナー

設立理事会後には設立記念セミナーが開催され、「都留市版CCRC構想と大学の地域貢献」と題し、堀内都留市長、本学福田学長をはじめ、各学長・校長がパネリストとして参加しパネルディスカッションが行われました。

文大だより

キャリア支援特別講演会 岡崎朋美氏「夢に責任を持って～どこまでも挑戦～」

6月24日(水)16時30分から音楽棟1階ホールにて、本学特任教授岡崎朋美氏によるキャリア支援特別講演会「夢に責任を持って～どこまでも挑戦～」が開催されました。インタビュアーにYBS山梨放送の芦澤紀恵アナウンサーを迎え、対談形式で行われたこの講演会に、学生約120名が参加し、お二人の話に耳を傾けました。

長野オリンピックスピードスケートのメダリストであり、結婚・出産後も第一線のアスリートであり続けた岡崎氏の選手生活を写真とともに振り返りながら、夢の実現に向け最大の努力を続けた岡崎氏の、その挑戦を支えたものは何か、経験を交えてお話いただきました。

また、「突破する力」として10のキーワードの中から、自身の力の根源、強さの秘訣ベスト3を選んでいただき、その結果を会場の学生に予想してもらうミニゲームも行いました。岡崎氏が選んだキーワードは、第1位「分析力・洞察力」、第2位「独創性・ひらめき」、第3位「決断力」。この結果は学生にとって意外だったようで、予想が的中した学生はわずか2名でした。

最後に、「乗り越えられない壁はない。模索し、楽しみながら登りつめてほしい」と、学生にエールを送っていただきました。



県民コミュニティーカレッジ講座

地域交流研究センターでは、11月8日(日)と14日(土)の2日にわたり、「大学コンソーシアムやまなし」との共催事業である「県民コミュニティーカレッジ」の地域ベース講座を開講しました。

今年度は、「映画で学ぶ欧州小国のあゆみ」をテーマとして、本学COC推進機構 准教授の山口博史先生を講師にお迎えし、1959年に公開されたオードリー・ヘップバーン主演の映画「尼僧物語」を題材として、欧州の小国「ベルギー」の歴史や文化について学びました。

1日目は、前半に映画「尼僧物語」を鑑賞しつつ、受講者に映画の中で感じた疑問点などを書き留めていただきました。後半は山口先生より、映画の時代背景やロケ地についての解説や、受講者から寄せられた疑問点について、ご説明をいただきました。

2日目は、おもに映画で描かれた時代(1940年代)から後の、現在までのベルギーの歩みについて、前回受講者からいただいた感想や、山口先生ご自身の体験や研究活動などを絡めつつ、言語や宗教、国民性など、さまざまな面から解説をいただきました。



当日の講義の様子

ベルギーという1国だけでなく、日本も含めたさまざまな国の国民性や、社会学という学問の研究手法などについても話が及び、大変実りのある講座となりました。

参加者からは「映画を題材として考えるという発想は素敵だと思いました」「参加者からのコメントも啓発されることが多かった」「最近の世界情勢に興味があるので面白かったです」などの感想が寄せられました。

文大だより

夏季集中講座「現職教員教育講座」を開催

本年度も夏季集中講座として、初等教育学科・地域交流研究センター・教職支援センターの共催による「現職教員教育講座」を、7月27日（月）・28日（火）の2日間にわたって開催いたしました。

例年の通り、一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探る「教師の子ども理解と学習指導」をテーマとし、2日間で4講座を開講いたしました。第1日目は、宮下聡先生（教職支援センター特任教授）の『思春期の子どもと向き合う教育実践』と春日由香先生（初等教育学科准教授）の『教科に関する研究講座Ⅰ～子どもがわかる授業を作る・国語』、第2日目は、山崎隆夫先生（教職支援センター特任教授）の『子ども理解と学習指導』と上原明子先生（初等教育学科専任講師）の『教科に対する研究講座Ⅱ～英語を楽しむ授業をつくる』を開講いたしました。

本講座は、山梨県教育センターによる「十年経験者研修」の選択講座にも指定されており、都留市内だけでなく県内各地の小中学校及び高等学校より、延べ60名以上の先生方のご参加をいただきました。



子どもがわかる授業を作る・国語



英語を楽しむ授業をつくる

教員免許状更新講習

本学では、例年教員免許状更新講習を開催しております。7年目を迎えた今回は、7月4日から8月2日までの土曜日又は日曜日、計8日間にわたり全12講座を開講いたしました。この間、149名の方に受講していただき、12講座における延べ受講者数は454名にのびりました。

開講した講座は以下のとおりです。

必修領域：「教育の最新事情」佐藤 隆教授、堤 英俊講師、大島 英樹立正大学教授

○小学校教諭向け：『数と図形の歴史から算数の楽しさを学ぶ』（算数教育）岡野 恵司講師、『子どもとともに絵本の世界へ』（国語教育）藤本 恵教授、『感性を働かせて描いてみよう！動いてみよう！』（図工体育）【図工】竹下勝雄教授、鳥原正敏教授、布山 浩司特任准教授【体育】麻場 一徳教授、『意味のやりとりを重視した外国語活動の授業づくり』（小学校英語教育）上原 明子講師、『地層と化石の観察』（理科教育）鷹野 貴雄非常勤講師、前田 誠一郎前非常勤講師

○中学校、高等学校教諭向け：『経済学・現代日本経済を学ぶ』（社会分野）村上 研一中央大学准教授、『国語教材の読みと授業づくり』（国語分野）牛山 恵名誉教授、『Authentic Material と Trivia による英語授業の活性化』（英語分野）松土 清特任教授

○小学校、中学校、高等学校教諭向け：『子どもたちの心とかかわるために』（教育相談臨床）筒井 潤子教授、『学校におけるICT活用の現状・課題・将来と情報モラル教育』（情報教育）杉本 光司教授、日向 良和准教授、『学級集団育成の理論とグループアプローチ』（学級経営）品田 笑子特任教授

文大だより

文大名画座『ツナグ』上映会、辻村深月氏トークイベント



辻村深月氏

6月27日（土）、都留文科大学創立60周年事業の一つとして、「文大名画座『ツナグ』上映会、辻村深月氏トークイベント」を行いました。当日は、2部構成で実施され、第1部では、山梨県出身で直木賞作家の辻村深月氏原作の映画『ツナグ』の上映会が、第2部では辻村氏ご本人をお招きしてのトークイベントが実施されました。トークイベントでは、イベントコーディネーターを務められた本学国文学科の古川教授をお相手に、辻村氏に小説家としての生き方や女性のキャリアなどについてお話し頂きました。当日は本学の学生も数多く出席し、質疑応答の時間には、卒業論文や就職活動についてなど、自身がいま

現在抱えている悩みや不安について質問しておりました。辻村氏は、学生の質問に対し、ご自身のエピソードを織り交ぜながら親身に回答して下さり、参加した学生たちにとって有意義な時間になりました。当日は200名近くの方々にご参加頂き、盛況のうちに終わることができました。



学生の質問に答える辻村氏

由紀さおり・安田祥子ファミリーコンサート



都留文科大学合唱団

6月28日（日）、都の杜うぐいすホールにて、都留文科大学創立60周年事業の一つとして、「由紀さおり・安田祥子ファミリーコンサート～うたが咲いています～」を開催しました。コンサートは2部構成で実施され、第1部では本学合唱団が合唱曲を披露し、第2部からは由紀さおりさん・安田祥子さんが登場し歌の披露が行われました。さらに、第2部では、7年連続で全日本合唱コンクールにおいて金賞を受賞している本学合唱団と由紀さおりさん・安田祥子さんとのコラボレーション曲が披露されました。当日は数多くの方が来場され、大盛況のうちに終わることができました。

編集後記

ゴリラに学ぶ
「共食」と「共感」

奥脇奈津美

名古屋市にある東山動物園で、シャバーニというオスのニシローランドゴリラが、イケメンゴリラとして人気を集めている。隆々とした筋肉や精悍な目つきに人は惹かれるらしい。彼はまた、2頭の子どもの面倒をよくみるイクメンゴリラでもあるという。

昨年、ゴリラ研究で有名な京都大学総長の山際寿一氏の講演を聞く機会があった。オスゴリラは、子どもができると次第に立派な体つきになり、態度も悠然としてきて、メスや子どもにやさしく接するようになるという。特に子どもに慕われるようになると、態度が変わる。成熟した大きなオスのゴリラ、シルバーバックは、銀色の背中の上で、だまって、子どもたちを優しく遊ばせる。オスらしくなる秘訣は育児であるということか。

言語の出現へとつながるそれ以前のコミュニケーションについて、山際氏は人間に特有な「家族」という社会単位の創造が重要な役割を果たし、また、そこには「食事の仕方」が関わってきたという。多くの動物は通常、争いを避けて「個食」を選ぶが、ゴリラや人類は、食べものを分かち合いながら共に食事をする道を選択した。その結果、家族や仲間との関係性を築き、「共感」を深めてきた。

しかし人類は、言語を獲得することで集団の規模を増大させる一方、次第に「共感」する力を失ってきているのではないかと氏は指摘する。インターネットやLINEを通して数えきれない相手とつながることで、実空間を共有して、同じものを見て、聞いて、触って、共感する機会を失いがちな現在の状況を考えると、その指摘もうなずける。

現在、ゴリラ社会は存続の危機にある。氏が支援する地元主導の自然保護活動を目指すポレポレ基金（略称ポポフ）というNGO活動がある。少しでも活動資金の足しになればと、キュートなゴリラたちのカレンダーを購入している。泰然としたゴリラの優しい瞳が、私たちが一年間じっと見つめてくれる。



ポポフのカレンダー



エネルギー転換を
どう進めるか

高橋 洋 他／著
2015年10月

岩波書店 3,400円 + 税
◇たかはし ひろし
社会学科教授

開発社会学を学ぶための
60冊

佐藤 裕 他／著
2015年7月

明石書店 2,800円 + 税
◇さとう ゆたか
比較文化学科准教授



本 ぶんだい堂



南島残照
台湾原住民のイレズミ

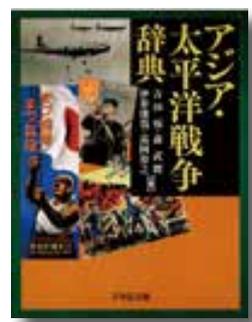
山本 芳美／監修
2014年

ヴィジュアルフォークロア
(個人視聴用) 7,000円 + 税
(図書館使用) 28,000円 + 税
◇やまもと よしみ
比較文化学科教授

アジア・太平洋戦争辞典

伊香 俊哉 他／編
2015年10月

吉川弘文館 27,000円 + 税
◇いこう としや
比較文化学科教授



お詫びと
訂正

都留文科大学報第128号の内容に誤りがございましたので、訂正するとともにお詫び申し上げます。
目次(表紙)「学生による授業アンケート」の結果から (正)FD委員会委員長 平野耕一 准教授
(誤)FD委員会委員長 平野耕一 教授
人事異動 配置転換 初等教育学科講師 上原明子
前所属 (正)(教職支援センター講師) (誤)(キャリア支援センター講師)
転出 志村高男 (正)市立病院事務局副主幹 (誤)私立病院事務局副主幹